

ISSN 2434-9690

東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会
2020年1月

目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

コーパスに基づく類義語の意味分析の研究

— 「はがれる、むける」などを中心に—
A corpus-based analysis of synonyms expressions:
Focusing on *hagareru*, *mukeru*, etc.

李 響
LI Xiang

提要 本文运用语料库实例对离脱动词「おちる、とれる、はずれる、はがれる、はげる、むける」进行分析。从与离脱元的附着度这一角度分析各个离脱动词主语，提出离脱动词间的关系，并说明此关系与カラ格，形容词连体形共起的程度有关联的倾向。另外，针对以往研究中提出的「はがれる、むける」应属于位置变化还是状态变化这一问题，通过分析实例，从主语，カラ格，并列的ト以及形容词连体形4项进行讨论。

キーワード：離脱動詞 意味分析 コーパス 位置変化 状態変化

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. コーパスに基づく離脱動詞に関する考察
4. 「はがれる、むける」に関する考察
5. まとめ

1. はじめに

「はがれる、むける、おちる、とれる」は、(1) に示すように、あるものAがあるものBから離脱することを表す離脱動詞である（李 2016, 2019）。以下ではものAを離脱物、ものBを離脱元と呼ぶ。

(1) a. 木の皮がはがれた。 b. 木の皮がむけた。 c. 汚れがおちた。 d. 汚れがとれた。

本稿は、コーパスを参考にし、離脱を表す動詞類が各成分と共起する振る舞いを整理する。さらに、実例に基づき、李（2019）では「中間的な存在」とされる「はがれる、むける」意味特徴を記述した上、「はがれる、むける」は位置変化類か状態変化類かを考察する。具体的には、2節では、先行研究を紹介した上、その問題点を指摘する。3節では、コ

ーパスを用いて、「おちる、とれる、はずれる、はがれる、はげる、むける」と共起するガ格名詞並びにカラ格、結果を表す形容詞連用形と共起する頻度を確認する。4節では、「はがれる、むける」はカラ格、並列のト、形容詞連用形との共起現象を確認した上、位置変化類か状態変化類かを考察する。

2. 先行研究

2.1 離脱動詞に関する研究

李 (2019) は、「とれる、おちる、ぬける、はずれる、もげる、むける、はがれる、はげる」といった離脱動詞を分析対象とし各離脱動詞を位置変化類と状態変化類に分けている。さらに、「はがれる、むける」については、その中間的な存在であるとし、「はがれる」は、(2)のようにカラ格を取るが、場合により結果補語を取れる。「むける」は、(3)のように結果補語を取る一方、カラ格を取る例も存在すると述べた。また、李 (2019) は「はがれる、むける」は位置変化類と状態変化類の特徴を兼ねるが、(2b) (3a) のような例がわずかであるため、「はがれる」を位置変化類、「むける」を状態変化類に分類するとした。

(2) a. 細胞壁が細胞からはがれた。 b. 気道の内側の皮が薄くはがれた。

(3) a. かさぶたが背中からむけた。 b. みかんの皮が汚くむけた。

しかし、李 (2019) は例が僅少であるという理由だけで、分類を決めるという議論は妥当ではないと考える。本稿は、コーパスの実例に基づき、両語が位置変化として記述すべきか、状態変化として記述すべきかを考察する。

2.2 意味記述に関する研究

まとまった形で離脱動詞の意味を記述した研究は管見の限り見当たらないが、個別に各語を記述した研究としては宮島 (1972)、柴田 (1976) などが挙げられる。そのうち、共起するガ格名詞の特徴に関する指摘を表1、表2にまとめる。¹⁾²⁾

表1 各動詞と共起するガ格名詞に関する先行研究のまとめ (自動詞)

おちる	歯、色、ペンキ、汚れ、匂い、香り、憑きものなど	森田 (1977:133)
とれる	あるものに付属している固体、あるものに付着している事物	森田 (1977:334)
はずれる	あるものに固定されるもの	杉本 (1983:26)
	あるものに locking しているもの	Benom (2012:124)

表2 各動詞と共起するヲ格名詞に関する先行研究のまとめ (他動詞)

¹⁾ 「おちる、はずれる」は以下のように移動動詞の用法を持ち、このような用法を離脱動詞の用法と見なさない。詳細は李 (2016, 2019) を参照されたい。

²⁾ 自動詞「はがれる、はげる、むける」に関する意味記述は管見の限りでは見当たらないが、他動詞「はがす、はぐ、むく」が取る対象物の特徴を挙げる。「はぐ」と「はげる」は形態的には対応しているが、意味的には対応していないため、自他対応していないという指摘 (影山 1996) もあるが、本稿は、「はげる」の関連語であると考え、参考としては「はぐ」のガ格名詞の特徴を挙げる。

はがす	本来でなく本体に密着している、わずかの面積を覆うもの	宮島 (1972:79)
	本体にくっついてある状態である薄手のもの	柴田 (1976:144)
	密着してくっついている状態のもの	坂東 (1979:38)
	面的に付着したもの	杉本 (2005:43)
はぐ	本体の一部ではあるが密着してはいないもの、対象物の部分だけ離れやすい状態になっているもの	鈴木 (1981:26)
むく	あるものの表面に近いところに、薄くあるもの。かなりの面積をおおうもの。	宮島 (1972:78-79)
	本体の一部としての表面、薄手のもの	柴田 (1976:144)
	本体を覆っているもの	坂東 (1979:38)
	面的であるもの、かつ本体と一体化であるもの	杉本 (2005:43)

また、「はがす、むく」を対象とした研究は坂東 (1981) と杉本 (2005) が挙げられる。坂東 (1981) は『「はがす」は『密着してくっついている状態のものを本体から引き離す行為』、『むく』は『力をあまり入れずに本体をおおっている対象物を除去し、中身を取り出す行為』(坂東 1979:38)」であると記述し、更に「はがす」はカラ格と共起することが可能である一方、「むく」は共起しないことを指摘している。杉本 (2005) は先行研究の問題点を指摘し、対象物、主体、手段、様態から「はがす、むく」を以下のように記述している。また、構文的な特徴に関する議論は随時言及する。

「はがす」：人間や動物が、面的に付着したもの的一方を移動し、分離した状態にする。

「むく」：人間や動物が、本体から面的な付着物を分離し、本体をあらわな状態にする。

ただし、本体と付着物は一体のものと捉えられるようなものでなければならない。

(杉本 2005: 43)

以上は離脱動詞を個別に考察した指摘であるため、お互いの関係が明確に見えない。本稿では、まずコーパスに基づき、以上の離脱動詞と共起するガ格名詞を確認し、離脱物と離脱元の関係から整理する。次に、「はがれる、むける」は位置変化か、状態変化かという問題を探求する。

3. コーパスに基づく離脱動詞に関する考察

本節は、ガ格名詞の特徴、カラ格並びに結果を表す形容詞連用形と共起する頻度から、離脱動詞である「おちる、とれる、はずれる、はがれる、はげる、むける」を整理する。

3.1 ガ格名詞について

(4) では、NLB から各動詞が取るガ格名詞 (離脱物)³⁾ を上位順で挙げる。「はげる、むけ

³⁾ ただし、(i) のように、「むける、はげる」は離脱物ではなく、離脱元をガ格名詞に取る場合がある。この場合では、場面もしくは常識から離脱物を想定し、離脱元との関係を考える。例えば (i) は、離脱物である「木の皮」が離脱元である「木」から離脱することを表す。

(i) 木が剥けたように表面がぼろぼろになります。(再掲)

る」は例が少ないため、NLT から抽出した。

(4)おちる：葉、汚れ、瓦、葉っぱ、木の葉、髪の毛、枝、髪、油、毛…

とれる：疲れ、痛み、汚れ、かさぶた、染み、角質、脂肪、ボタン、毛、底…

はずれる：チェーン、ボタン、蓋、板、カバー、ひも、タイヤ、前輪、瓦、車輪…

はがれる：爪、皮、塗装、膜、鱗、網膜、シール、クロス、部、表面…

はげる：塗装、メッキ、皮、化けの皮、表面、塗料、色、絵具、ペンキ、皮膚…

むける：皮、皮膚、角質、かさぶた、包皮、体、こと、頭、部分、薄皮…

これらのガ格名詞を離脱元との密着度の度合いという点から整理すると表3になる。各離脱動詞が取ることができるものに○を付け、取らないものを空白のままにする。

表3 各離脱動詞が取れる離脱物の特徴

密着度	代表例	とれる	おちる	はずれる	はがれる	はげる	むける
低	疲れ、痛み	○					
	汚れ	○	○				
	毛、ボタン	○	? ⁴⁾	○			
	シール				○		
高	塗装、ペンキ				○	○	
	皮				○	○	○

1番密着度が低いのは、「疲れ」のような本来的ではない精神的なものである。2番目は「汚れ」のような離脱元の表面に付着しているものである。3番目は「毛、ボタン」など離脱元に固定されているもの、またはその付属品である。離脱元との接触は点的であるものであるため、離脱元の本来的なものであっても密着度が低いと思われる。4番目は「シール」のような後から付けたものであるが、離脱元と面的に接触しているため3番目よりは密着度が高い。5番目は「塗装、ペンキ」など離脱元の表面に付けられたものである。4番目と同様に離脱元と面的に接触しているため、密着度が高いと考える。また、「塗装、ペンキ」などは後から付けたものと捉えても良い一方で、すでに離脱元と一体化しているとも考えられる点で、4番よりは密着度が高い。6番目は「皮」など離脱元の表皮のようなものである。ここでは、角田（2009）が指摘する所有傾斜の観点で離脱物を考えたい。

(5)所有傾斜：身体部分>属性>衣類>（親族）>愛玩動物>作品>その他の所有物

（角田 2009：127）

角田（2009）は所有物の種類と所有者敬語の関係を考察し、所有物が身体部分である場合は最も自然であり、属性である場合は全体的に所有者敬語の自然さは身体部分の場合よりや

⁴⁾「落ちる」は固体を離脱物として取る場合は、移動動詞の解釈が強くなるため、「○」ではなく、「？」で表示する。詳細は李（2016）を参照されたい。

や低く、衣類である場合は属性の場合よりやや落ち、愛玩動物、その他の所有物の場合は自然さが非常に低いと指摘している。つまり、所有傾斜が高い程、所有者敬語の自然さの度合いが高くなると言える。離脱動詞において、離脱物の離脱動作に伴い、所有傾斜が高くなる程、全体、つまり離脱元が変化すると見なす度合いが高くなる。言い換えれば、所有傾斜が高い離脱物では、離脱元と密着し、両者を一体と見なす度合いが高いため、離脱物が離脱すると、離脱元も変化すると考える。このため、密着度がより高い離脱物を取る場合は、離脱元が変化するというように捉えやすいと考える。

3.2 形容詞連用形、カラ格との共起について

離脱物と離脱元との密着度から見ると、「むける>はげる>はがれる>はずれる>とれる>おちる」に並べられる。密着度がより高い離脱物を取る場合は、離脱元の状態変化が捉えやすいと考えると、その動詞が結果を表す形容詞連用形も自然に取ることができるという傾向があると考えられる。一方、状態変化を表しにくい場合は、位置変化を表しやすくなるかを見る。そこで、NLB から各離脱動詞が結果を表す形容詞連用形、カラ格と共起する件数、頻度を表4にまとめる。「形容詞連用形・カラ格を取る総数/動詞総数 比率」で列挙する。

表4 各離脱動詞が形容詞連用形、カラ格との共起

	むける	はげる	はがれる	はずれる	とれる	おちる
形容詞連用形	1/73 1.3%	2/68 2.9%	0/441 0%	0/1994 0%	0/3922 0%	0/9138 0%
カラ格	0/73 0%	0/68 0%	21/441 4.7%	17/1994 0.8%	37/3922 0.9%	113/9138 1.2%

結果を表す形容詞連用形の件数が少なく、差があるとは判定できないが、「むける、はげる」はそれと共起することが確認できる。このことから、密着度が高い離脱動詞は結果を表す形容詞連用形と共起しやすい傾向がある程度予想できると思われる。また、カラ格との共起を見ると、「はがれる」以外には、密着度が高い離脱動詞がカラ格と共起しにくいという傾向が見られる。「はがれる」は離脱動詞の用法しか持たない一方、「はずれる、とれる、おちる」は(6)のように用法が多様であるため、母数が大きくなるという理由から、比率が低くなると考えられる。

(6)a. でもアテがはずれて…。(『みのもんた十八番勝負』, 2002, 770)

b. 陽が落ちた。(司馬遼太郎著 『大盗禅師』, 2003, 913)

c. 家庭と連絡が取れない。(長島猛人著 『チャイムが鳴ったら』, 2002, 370)

以上から、各離脱動詞が取る離脱物は、離脱元との密着度から整理すると傾斜が見られ、結果を表す形容詞連用形、カラ格との共起しやすさと関連がある傾向が見られる。用例が少ないため、形容詞連用形と共起する振る舞いを十分に考察できず、今後は結果を表す副詞を入れてその共起を確認することを課題としておきたい。

4. 「はがれる、むける」に関する考察

本節は、NLB⁵⁾を用い、実例をもとに両語と共起する成分を確認した上、位置変化を表すか、状態変化を表すかという観点から両語の意味特徴を考察する。「はがれる、むける」はNLBにおける総数がそれぞれ441例、73例で、件数は少ないため、NLT⁶⁾を参考する場合もある。

4.1 ガ格名詞の特徴

以下では、「はがれる、むける」が取るガ格名詞を上位順で挙げる。

はがれる：化けの皮⁷⁾、爪、皮、塗装、膜、鱗、網膜、シール、クロス、部、表面、仮面、メッキ、ペンキ、コーティング、キューティクル、皮膚、紙、絵の具、胎盤、など

むける：皮、皮膚、ほとんど、包皮、層、息子、踵 (NLBより)

：皮、皮膚、角質、かさぶた、包皮、体、こと、頭、部分、薄皮、樹皮、尻、ところ、粕、粕膜、膝、表皮、表面、被膜、野菜、など (NLTより⁸⁾)

上記のガ格名詞から、「はがれる、むける」のガ格名詞は離脱元の表面に付着する面的⁹⁾なものであるという共通点を持つ。一方、「はがれる」は、「塗装、シール」など後から離脱元に付けたものも取れるし、「皮、皮膚」など、離脱元の本来の一部分も取れるのに対し、「むける」は離脱元の本来の一部分のみを取る。

(7)a. 塗装がはがれていれば、トランクパネルを一度、脱着または交換している証拠です。(佐藤秀樹著『中古車選び完全マニュアル』, 2001, 537)

b. さばは、皮がはがれやすいので、注意します。(文京区立保育園栄養士会著『組み合わせが生きる！保育園の献立300』, 2001, 369)

(8) 皮が剥けたり、肌がかゆくなってきます。(教えて!Ziddちゃん乾燥対策を教えてください!)

また、両語は「皮」のような離脱元の本来の一部分を取れるが、着目するものに差が多少ある。以下の(9a)は、皮が炎症で白くなって離脱するという場面を描写すると考えられる。そして、「手」と「皮」のどちらかと言うと「皮」に着目する。それに対し、(9b)は、薬品で皮を離脱させ、手がきれいになるという場面であると考えられ、「手」に着目する。

(9)a. 手の皮がはがれた。 b. 手の皮がむけた。

このことは(10)(11)の例文からもうかがえる。(10a)の場合は、「皮膚がはがれるように」に続くのは「切断されることがあります」という文であり、この文は「皮膚」の様子を

⁵⁾ 検索システムとしては、NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) を用いた。→<http://nlb.ninjal.ac.jp/>。

⁶⁾ 検索システムとしては、NINJAL-LWP for TWC (NLT) を用いた。→<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/>

⁷⁾ 「化けの皮がはがれる」は、ことわざ辞典に掲載され、慣用的な表現である。このため、本稿の分析対象から除外する。

⁸⁾ NLBでは、「むける」がガ格名詞と共起する例は25しかないため、NLTも参考にした。

⁹⁾ 「面」は「点」の対立概念と捉える。本稿は杉本(2005)が指摘している「はがれる、むける」のガ格名詞が面的なものであることに同意する。

描写すると思われる。一方、(11a)は、「皮膚の皮が剥け」に続くのは、「潰瘍になり」という文であり、この文は離脱元である「皮膚」について描写している。(10a) (11a)を(10b) (11b)に言い換えると許容度が下がる。このように、離脱物に着目する場合は「はがれる」が優先的である一方、離脱元に着目する場合は「むける」が優先的であると考える。

(10)a. たまに指輪が何かに引っかかって指の皮膚がはがれるように切断されることがあります。
(溝口外科整形外科病院-診療内容-手の外科-)

b. ??たまに指輪が何かに引っかかって指の皮膚がむけるように切断されることがあります。

(11)a. 毒性がさらに強い場合、皮膚の皮が剥け潰瘍になり、治療にも時間がかかります。
(全身にできる皮膚疾患 | じんましん (蕁麻疹) 事典)

b. 毒性がさらに強い場合、皮膚の皮が剥け潰瘍になり、治療にも時間がかかります。

また、以下のように果物の「皮」をガ格に取る場合は、NLB、NLTで検索した結果、「むける」のみを用いることが可能である。これは、果物の場合は、皮を離脱させる目的が中身を食べられるようにするためであるため、離脱元に着目すると考える。例えば、(12)は、「皮」が離脱することで、「果物」の中身が表面に出てくるという変化を起こり、離脱元に着目することが一般的である。

(12)a. みるみるうちにオレンジは皮が剥けた状態になり、中身が出て来て、最後は食べられてしまったのか一房残るだけ。
(描きながらオレンジの状態が変化していく静物画、制作過程の動画公開。 | Narinari.com)

b. *みるみるうちにオレンジは皮がはがれた状態になり、中身が出て来て、最後は食べられてしまったのか一房残るだけ。

さらに、「むける」は以下のように、離脱物ではなく、離脱元をガ格名詞に取ることができ¹⁰⁾。(13) (14)のガ格名詞は「木、踵」であり、しかも「木、踵」が皮で覆われている状態から覆われていない状態へと変化するという意味を表すため、離脱元に着目する。

(13) 木が剥けたように表面がぼろぼろになります。
(修行中)

(14) あの蹴り返しのせいで踵が剥けてきちゃいました。(Yahoo!ブログ, 2008、ペット)

以上はガ格名詞から「はがれる、むける」を考察し、「はがれる」は、後から離脱元に付けたものも取れるし、離脱元の本来の一部も取れるのに対し、「むける」は離脱元の本来の一部のみを取ることが可能である。両語がガ格名詞において重なりが見られるが、「はがれる」を用いる文は、離脱物に着目する一方、「むける」は離脱元に着目する。離脱動詞は、I) 離脱物が離脱元から位置変化する、II) 離脱物がなくなることで離脱元が状態変化するとい

¹⁰⁾ 杉本(2005)では、「むく」は「本体」を対象物にとることができ、「本体をあらわな状態にする」という意味を表すとされている。本稿は同意する。

う2つの事象を表す¹¹⁾ため、離脱物に着目する場合は離脱物の位置変化、離脱元に着目する場合は離脱元の状態変化を表すと考えられる。このように、「はがれる」は離脱物の位置変化、「むける」は離脱元の状態変化を表すと考える。

4.2 カラ格との共起

NLB、NLTで「…からはがれる」を検索すると、カラ格と共起する例はそれぞれ21件、303件である。数多くではあるまいが、以下のようにカラ格と共起し、離脱物の位置変化を表すということを確認できる。(15)はカラ格を取ることで、「胎盤」が「子宮の壁」から移動することに重点を置いて描写する。(16)も同様で、「壁面」から移動することを表す。一方、NLB、NLTで検索した結果、「むける」がカラ格と共起する例は以下の1件のみがある¹²⁾。

(15)赤ちゃんが産まれた後、胎盤が子宮の壁から剥がれて外に出てしまいます。

(お産の進行と入院のタイミング)

(16)水槽壁面に吸盤を使ってとりつけるのですが、壁面から吸盤がはがれやすく実際に
は役に立ちません。(熱帯魚 / ディスカス よくある質問のお答え)

(17)は起点を示すカラ格を取り、「皮」が「肩」からの位置変化を表すことが可能である。しかし、文脈を合わせて考えると、「皮」の位置変化より、むしろ「肩」から「指先」まで皮で覆われていないという「人」の状態を表すと考えられる。そして、カラ格を取る節は「人」の連体節であるため、「人」に重点を置く文であると考えられる。

(17)中には熱さから逃れて来て川の中で息絶えた人、水面で肩から皮が剥けて爪の先で
繋がった皮が水面を浮遊して手が倍の長さに見える状態で息絶えている人、様々な
状態の死人だかまだ息が有るのか判らないような人々の様子にまるで生き地獄を
見た気がしました。(広島・長崎の記憶被爆者からのメッセージ朝日新聞社)

以上から、「はがれる」はカラ格と共起することが可能であり、離脱物の位置変化を表すの
に対し、「むける」は一般的には離脱物の位置変化を表しにくいと考える。ただし、離脱元
の状態を描写する場面において、カラ格を取り、ものAの位置変化を表すことが可能になる。
この場合でも、ものAの位置変化より、むしろものBの状態に重点を置くと考える。

4.3 並列のトとの共起

NLB、NLTで「…とはがれる」「…とむける」を検索した結果、「副詞+と」を除外すると、
「はがれる」は以下の3件があり、「むける」は0件である。

(18)これら複数の素材を組み合わせた包丁を急速に乾燥すると、それぞれの素材の乾

¹¹⁾ 詳細は李 (2019) を参照されたい。

¹²⁾ NLB、NLTではそれぞれ4件、14件であり、そのうち以下のように順序を示すものがほとんどである。

i. 完熟状態になったら、アボカドの真ん中から縦方向にぐるりと包丁を入れ、両手で軽くひねると簡単に両側から綺麗に剥けます。 (nina-kaz.com:皆で楽しくアボカド栽培)

燥時の伸縮率や伸縮速度が異なるため、包丁の中に「くっついている物とはがれようとする力」や「まがろうとする力」などが生まれ、結果、金属疲労などがたまって壊れやすくなったり、ハンドル部分等に早くガタがきたりします。

(包丁の疑問にズバリ答えます！__包丁辞典【使い方技術編】利光)

トで結びつく成分が同質であると思われるため、「はがれる」の場合はもの A と B を区別して扱う必要がないと考えられる。この現象について杉本 (2005) の指摘が挙げられる。

(19)a. くっついてしまった紙をはがした。

b. *くっついてしまった紙をむいた。 (杉本 2005: 36)

これらの例では、2 枚の「紙」や二つの「組織」は、どちらが主で、どちらが従ということはなく、先の本体と付着物という関係にはないと考えられる。つまり、本体と付着物の区別のない、単に付着した二つの物体を分離した状態にするという動作の場合には、「はがす」は使えるが、「むく」は使えないことがわかる。(杉本 2005: 37)

上記の文はもの同質である A と B が元のところから位置変化することにより、離脱動作が行われる場面である。そして、前述したが、「はがれる」は離脱物の位置変化、即ち実際に離脱するものの位置変化を表す。このため、A と B は同質であっても、一方が主であっても、位置変化するものが「はがれる」のガ格名詞に取ることが可能であると考え。一方、「むける」は前述したように、離脱元の状態を表す。例えば、果物である場合は、皮が離脱することで中身が出てくるということを表す。手の皮である場合は、手が皮で覆われていなくなる状態を表す。つまり、「むける」の場合は、二つのもののうち、必ずしも一方が主でなければならない。しかも、主であるものの状態変化を表すと考える。

4.4 形容詞連用形との共起

本節は、状態変化の結果を表す成分が両語と共起可能かどうかを検討する。そこで、NLB、NLT の「形容詞連用形は剥ける」「形容詞連用形ははがれる」という項目から該当の例を抽出する。いずれも用例が少なく、しかも結果の変化を表すと確定できるものは、「むける」は 1 件であり、「はがれる」は 1 件である。

(20) やたら長い嘴と赤く剥けた顔に、初対面だとビビるかもしれませんが、魔術師系のヤグードさんがこの姿である事から、おそらくこれは素顔でなく術者が着用するマスクの類でしょう。 (食肉系統)

連体修飾の形であるが、「顔が赤く剥けた」とも言えるため、離脱元である「顔」の状態変化を表す文であると考え。また、「はがれる」は (21) の例が存在する。(21) の「汚く」は「テープ」が離脱した後に「汚く」になったという解釈が可能である。

(21) 外した後に両面テープ部分が汚くはがれますし、エアロ用の両面テープなど売っていません。(両面テープで取り付けって普通ですか?-国産車-教えて! goo)

用例が少ないため、十分に考察できたとは言えないが、実例があるため、「むける」は離脱元の状態変化の結果を表す形容詞連用形、「はがれる」は離脱物の状態変化の結果を表す形容詞連用形と共起することが可能であると考えられる。

5. まとめ

本稿は、コーパスを用い類義語である「おちる、とれる、はずれる、はがれる、はげる、むける」を考察した。離脱元との密着度という点から各離脱動詞が取る離脱物を分析し、各動詞を整理した。さらに、密着度による見られる傾斜が形容詞連用形、カラ格との共起とも関連することを述べた。また、ガ格、カラ格、並列のト並びに形容詞連用形との共起から、「はがれる」は主に離脱物の位置変化を表し、「むける」は主に離脱元の状態変化を表すことを明らかにした。

参考文献

- 角田大作 (2009) 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語— (改訂版)』くろしお出版
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版
- 柴田武(編) (1976) 『ことばの意味1：辞書に書いてないこと』平凡社
- 杉本武 (1983) 「はなれる・はずれる・とおざかる」『日本語研究』6、東京都立大学日本語研究会：17-26
- (2005) 「動詞の意味分析：「はがす」と「むく」」『文藝言語研究 言語篇』47、筑波大学文藝・言語学系：33-43
- 鈴木さかゑ (1981) 「はぐ・そぐ」『日本語研究』4、東京都立大学日本語研究会：25-27
- 坂東多衣子 (1979) 「はぐ・はがす・むく」『日本語研究』2、東京都立大学：35-39
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語—意味と使い方』角川書店
- 李響 (2016) 「離脱動詞と移動動詞の比較—「とれる」「おちる」を中心に—」『言語学論叢オンライン版』9号、筑波大学一般・応用言語学研究室：75-86
- (2019) 「離脱動詞のタイプと移動動詞、状態変化動詞との関係—「とれる、はずれる、むける」などを中心に—」『KLS Selected Papers1: Selected Papers from the 43rd Meeting of the Kansai Linguistic Society』、関西言語学会：61-72
- Benom, Carey. 2012. The Semantics of some Verbs of Separation in Japanese. 『九州大学言語学論集』33、九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室：107-132